に伴い、主幹を含む３幹が枯れてしまい、現在はひこばえ２本が残るのみである。残った２本のひこばえも枯死が懸念されたが、樹勢回復処置により、花芽・幹は回復傾向にある。

④　古天神跡

布多天神社が、文明９年（1477）に甲州街道沿いの現在地に鎮座するまであったとされる故地で、史跡下布田遺跡の約 450 m西方に位置する。現在は古天神公園として整備されている。発掘調査では、縄文時代の土坑・集石土坑、５世紀前半と思われる円墳３基（古天神１号～３号）、古墳時代後期の竪穴住居跡３軒、中世の地下式坑・土坑墓・積石状遺構、近世の集石土坑などが検出されているが、これまでのところ「古天神」の存在を窺わせる遺構・遺物は確認されていない。

(4)　文化・観光施設

調布市内の主な文化・観光・教育施設を、以下に挙げてみる。

①　調布市郷土博物館・郷土博物館分室

調布市郷土博物館は、史跡下布田遺跡から西方 1.2km に所在する。郷土博物館では、郷土の歴史や文化、自然に関わる考古資料、古文書、民俗資料など様々な資料を常設展示しており、下布田遺跡の出土遺物も展示している。

史跡指定地の西側に隣接する郷土博物館分室は、現在は主に調布市遺跡調査会の事務所として利用している。通常公開はしていないが、１階展示スペースでは、下布田遺跡をはじめ市内遺跡から出土した考古資料を展示しており、事前予約制で見学対応している。このほか、史跡下布田遺跡で活用事業を行う際の会場や休憩所などとして利用している。

調布市郷土博物館（左）・常設展示室（右）

②　調布市武者小路実篤記念館・実篤公園

市域の東端部、京王線仙川駅またはつつじヶ丘駅から徒歩５分のところに、武者小路実篤記念館と実篤公園がある。明治から昭和にかけて文学、美術、思想、演劇と幅広い分野で業績を残した武者小路実篤は、昭和 30 年から昭和 51 年に逝去するまでの 20 年間をこの地に暮らした。邸宅と敷地は、実篤の死後、遺族より数々の遺品等とともに、調布市に寄贈され、できる限り実篤が暮らしていた当時のままに保存されている。昭和 53 年からは「実篤公園」として公開され、市民の憩いの場として親しまれている。昭和 60 年には、隣接地に実篤の生涯と著作、所蔵品を紹介する武者小路実篤記念館が開設

旧武者小路実篤邸外観（左）・仕事部屋（右）

され、文学や美術など多様なテーマによる企画展示が開催されている。なお、旧邸は「旧武者小路実篤邸主屋」として、平成 30 年 11 月 2 日、国登録有形文化財に登録された。

③　調布市文化会館たづくり

京王線調布駅から徒歩 3 分、市役所の東側に隣接して建つ調布市文化会館たづくりは、学習活動の場づくり、文化活動の場づくりなど 7 つの場づくりを基本理念とする、さまざまな機能を一つに束ねた複合施設である。館内にはホール、会議室、展示室、ギャラリー、中央図書館、コミュニティＦＭ放送局などがあり、個人・グループで様々な活動に利用されている。

文化会館たづくりでは、平成 18 年度に「調布市遺跡調査会 30 周年記念遺跡展　発掘の歩みと最新成果」を開催し、市内の発掘調査で出土した様々な遺物を展示したほか、平成 26 年度には東村山市、国立市、西東京市との共催事業として「多摩の遺跡発掘成果報告会」を開催し、下布田遺跡の調査成果の報告を行った。このほか、毎年、文化財講演会として、市内の遺跡や文化財に関連したテーマで講演会を行っている。

④　深大寺・深大寺水車館

深大寺は、天平 5 年（733）に満功上人が開山したと伝わる古刹である。江戸時代、慶応元年（1865）の大火により堂宇の大半は焼失し、現在の本堂は大正 7 年（1918）に再建されたものである。平成 29 年 9 月 15 日に国宝指定された「銅造釈迦如来倚像」（通称白鳳仏）をはじめ、国重要文化財「梵鐘」

深大寺本堂（左）・深大寺水車館（右）

など数多くの文化財を所蔵する。例年３月３・４日に行われる「厄除元三大師大祭」は、江戸時代の文献にも記されている歴史ある行事で、現在も２日間で 10 万人もの参詣者が訪れる。また、元三大師大祭に併せて開かれるだるま市は、日本三大だるま市の一つとして全国的にも有名である。

深大寺深沙大王堂から約 70 m南西に位置する深大寺水車館は、この地で明治後半から昭和 30 年頃まで使われていた水車小屋を復元したものである。文化・歴史・ぬくもりを持つ街の景観整備事業の一環として、平成４年に整備公開された。武蔵野台地の暮らしと生業を紹介する展示回廊を併設し、事前に予約すると、精米やソバ・小麦の製粉を体験することができる。

⑤　布多天神社

調布駅の北側、甲州街道沿いに鎮座する布多天神社は、創建年代は明らかでないが、延長５年（927）に制定された「延喜式」にその名が記される式内社である。元々は立川段丘南縁部に所在していたのが、多摩川の氾濫を避け、文明９年（1477）に現在地に遷座したと伝わる。江戸時代には布田五宿の総鎮守として五宿天神と崇敬され、境内で開かれる市は大変賑わったといわれる。現在も毎年９月に行われる例大祭や、月例祭では参道には市が立ち並び、天神の市として親しまれている。

宝永３年（1706）に再建された本殿、寛政８年（1796）建立の狛犬、豊臣秀吉による小田原攻めの際の「太閤の制札」が市指定有形文化財に指定されている。

布多天神社（左）・布多天神社狛犬（右）

⑥　都立神代植物公園・水生植物園

深大寺の北側に隣接する都立神代植物公園は、武蔵野の面影が残る都内最大の植物公園として、昭和 36 年に開園した。開園面積約 49ha を誇る園内には約 4,800 種 10 万株の植物が植えられ、梅や桜の名所としても知られている。ばら園、つつじ園、うめ園などの花園、芝生広場、雑木林、大温室などがあり、春と秋のバラフェスタのほか様々なイベントが開催されている。

また、深大寺の南側に位置する神代植物公園の分園、水生植物園は、国分寺崖線から滲出した湧水が集まって湿地帯になっていたところに、木道などを整備して公開したもので、アシやハナショウブ、カキツバタなど多くの種類の水生植物を楽しむことができる。園内の一部は、戦国時代前期、扇谷上杉氏が築いた深大寺城跡の第１・２郭にあたり、土橋や土塁、空堀が復元され、掘立柱建物の柱穴跡が平面表示されている。なお、湿地帯は、深大寺城跡の外堀の役割を果たしたものと思われる。

(4)　大学との連携

市域には、電気通信大学をはじめ、桐朋学園、白百合女子大学、東京慈恵会医科大学が立地しており、学園都市としての一面をもつ。これらの大学のほか、明治大学、東京外国語大学、ルーテル学院大学とは、文化・教育・学術・スポーツなどの分野で援助、協力し相互発展を図ることを目的とした、相互友好協力協定を締結している。

このほかにも、平成 27 年度には、史跡下布田遺跡再整理調査事業として、國學院大學久我山高等学校が昭和 39 年から 44 年にかけて実施した学術調査（第 2・3・7・8 地点）の再整理報告を、國學院大學研究開発推進機構学術資料センターに委託して実施するなど、大学・教育機関との連携を進めている。

(5)　他自治体との連携

調布市は、国指定史跡を 2 つ、史跡下布田遺跡と史跡深大寺城跡を有しており、これら史跡の保存や整備に資するため、全国史跡整備市町村協議会（以下「全史協」という）に加盟している。全史協は、史跡名勝、天然記念物等を有する自治体によって組織され、都内では調布市のほか、八王子市、府中市、国分寺市、西東京市、板橋区が加盟している（平成 31 年 3 月 29 日現在）。また、全史協の東京都協議会である東京都文化財保存整備区市町村協議会には、全史協加盟市以外に世田谷区、東村山市、国立市、多摩市が加盟しており、年一度の総会に合わせて講演会や現地視察などの研修会を行うほか、史跡の保護や活用について情報交換に努めている。

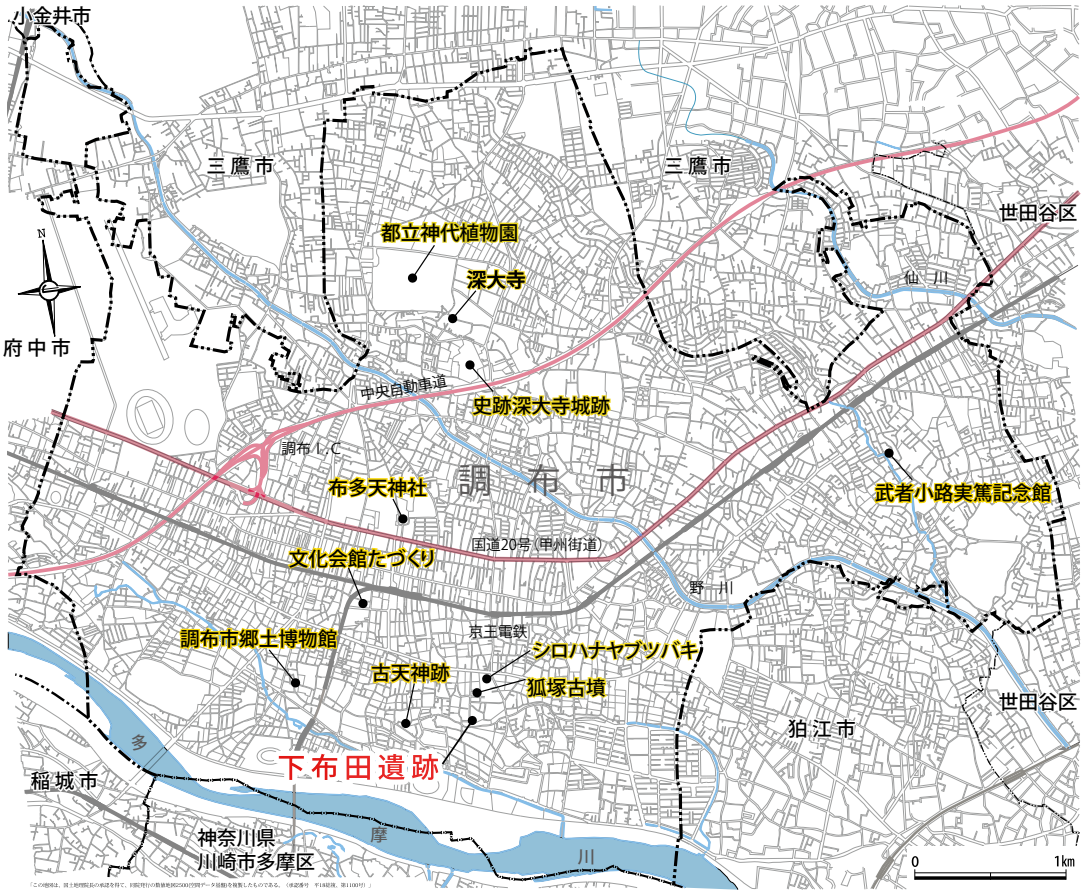

図 7　調布市域の主要な文化・観光施設

4　調布市の歴史的環境

調布市域には現在、65 か所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている（図 8）。

遺跡の分布状況を地形区分毎に概観すると、多摩川沖積低地では、現時点で遺跡の分布はほとんど認められず、わずかに染地遺跡 (49) の 1 遺跡を数えるのみである。

立川段丘面では、段丘南縁部と野川流域沿いに分布の集中が認められる。段丘南縁部では、府中崖線沿いを帯状に連続して遺跡が分布していることが分かる（飛田給遺跡 (38)・上石原遺跡 (39)・下石原遺跡 (40)・小島町遺跡 (44)・上布田遺跡 (45)・下布田遺跡 (46)・国領南遺跡 (47)・上ケ給遺跡 (48)）。また、立川段丘と武蔵野段丘を画する国分寺崖線に沿うように流れる野川流域では、左右両岸に遺跡が分布している（右岸：野川遺跡 (27)・野水遺跡 (63)・富士見町遺跡 (64)・中耕地遺跡 (35)・北浦遺跡 (36)・調布岡遺跡 (37)、左岸：宮田前遺跡 (28)・ませぐち遺跡 (29)・原山遺跡 (31)・本村遺跡 (33)）。

武蔵野段丘面では、まず立川段丘面と同様、段丘南縁部の国分寺崖線沿いに連続して遺跡が分布している様が見て取れる（宿遺跡 (16)・寺山遺跡 (18)・東原遺跡 (19)・仁王塚遺跡 (22)・深大寺城山遺跡 (23)・池ノ上遺跡 (21)・上野原遺跡 (25)・若葉町遺跡 (6)・入間町城山遺跡 (8)）。また、市域北東端部を三鷹市側から世田谷区側へと流れる仙川の左右両岸にも、遺跡の分布が認められる（右岸：仙川遺跡 (5)、左岸：北野遺跡 (65)・緑ヶ丘遺跡 (1)）。

次に、市域における各時代の様相について、下布田遺跡が位置する立川段丘面の遺跡群を中心に概観する。

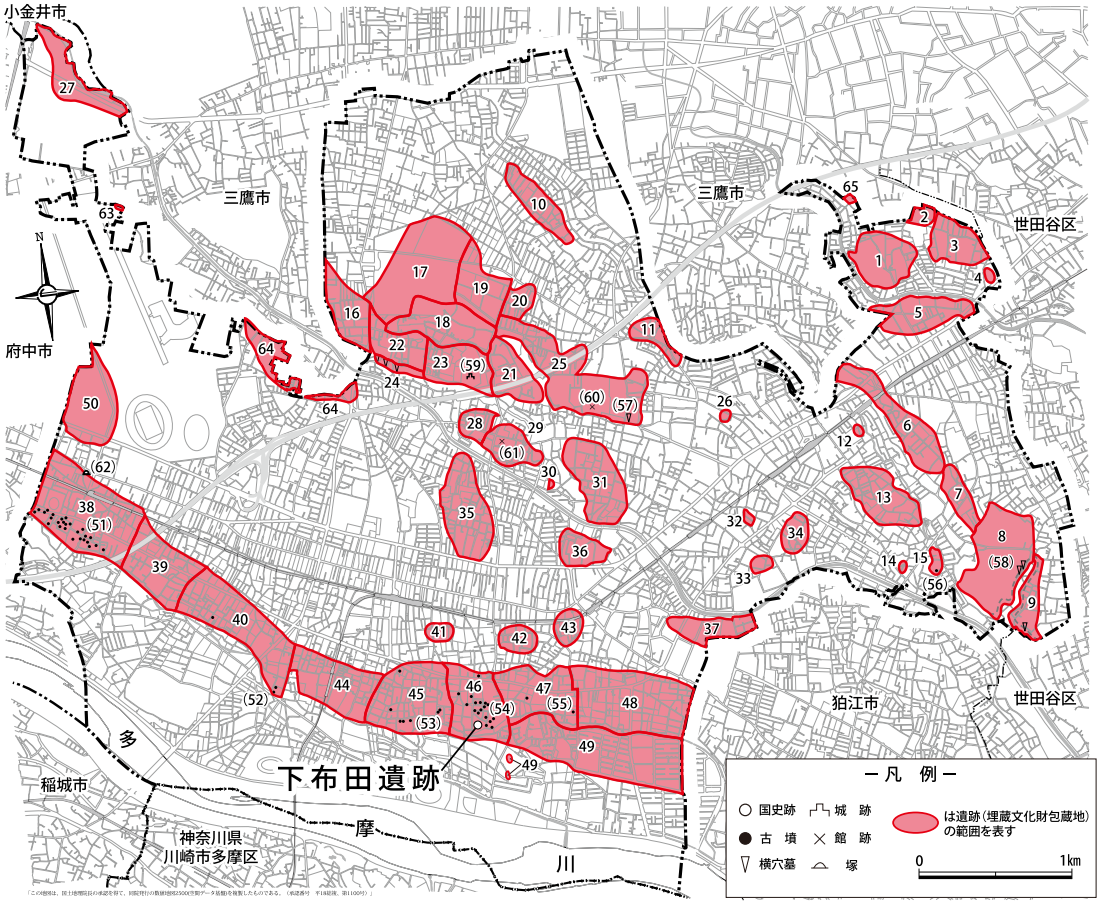

図８　調布市内遺跡分布図

(1)　旧石器時代

旧石器時代の遺物は、立川段丘南縁部では飛田給遺跡、上石原遺跡、上布田遺跡、国領南遺跡で確認され、上布田遺跡では槍先形尖頭器が、国領南遺跡ではナイフ形石器や礫群が検出されている。また、崖線よりやや離れた段丘平坦部に立地する飛田給北遺跡では、立川ローム第Ⅳ層中層から遺物集中部が12か所検出され、ナイフ形石器や角錐状石器、掻器、削器のほか、石皿状石器が出土している。

野川流域では、野水遺跡、野川遺跡、富士見町遺跡、入間町城山遺跡などが野川流域遺跡群として、国内でも有数の旧石器時代遺跡群として知られている。

(2)　縄文時代

縄文時代では、早期から晩期までの土器が検出されているが、明確な居住施設が確認されるのは中期以降である。中期の集落跡としては、飛田給遺跡で勝坂式期～加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡約60軒、敷石住居跡２軒が検出され、拠点的集落の存在が想定されている。また、小島町遺跡、上布田遺跡、下布田遺跡、国領南遺跡では、勝坂式期または加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡が単発的に検出されている。

中期末葉～後期初頭になると、上布田遺跡から下布田遺跡にかけて小規模集落が営まれ、両遺跡を隔てる埋没谷の周辺部で竪穴住居跡１軒と敷石住居跡６軒が検出されている。このうち上布田遺跡（第２地点）で検出された４号敷石住居跡は、いわゆる「柄鏡形敷石住居」で、称名寺Ⅰ式と加曽利ＥⅤ式の埋甕２基を伴う。出土遺物として、埋甕、深鉢、小型鉢、蓋形土器、大型石棒、石皿などがあり、このうち確実に住居に伴うと考えられる13点については、市指定有形文化財に指定されている。

後期前葉～中葉では、下石原遺跡で集団墓を伴う集落が確認されている。舌状台地の先端部に形成された浅い窪地を取り囲むように、堀之内式期～加曽利Ｂ式期の竪穴住居跡２軒と敷石住居跡１軒が、堀之内２式期～加曽利B1・B2式期にかけて構築された土壙墓65基とともに検出されている。また上布田遺跡では、埋没谷で堀之内１式期の土器棺墓が発見され、加曽利Ｂ式の半完形品も出土していることから、周辺域に後期集落が存在している可能性が高い。

縄文時代晩期では、飛田給遺跡、上布田遺跡、下布田遺跡、染地遺跡などで遺物が検出されているが、集落跡が確認されたのは下布田遺跡と染地遺跡のみである。染地遺跡は、下布田遺跡から約350ｍ南東の多摩川沖積低地に立地し、第26地点の調査では、古代遺構確認面の下層から安行3c・3d式期とみられる配石遺構や焼土跡を伴う土坑、晩期遺物集中域が検出され、下布田遺跡との関連性が注目される。

(3)　弥生時代～古墳時代

弥生時代になると遺跡数は減少し、集落跡が確認されたのは、多摩川沖積低地の染地遺跡、武蔵野段丘縁辺部の深大寺城山遺跡、入間町城山遺跡のみである。従来、市域における弥生文化の導入は後期以降とみられていたが、平成29年度に行われた入間町城山遺跡の発掘調査（第55地点）で、宮ノ台式期の竪穴住居跡が検出されたことから、中期後葉まで遡ることが明らかになった。

古墳時代になると、多摩川を臨む立川段丘縁辺部に、４世紀前半から５世紀前半にかけて方形周溝墓が、５世紀前半から７世紀中葉にかけては円墳が盛んに築造されるようになる。これらはその分布状況から５つの古墳群にまとめられ、上流から飛田給古墳群、下石原古墳群、上布田古墳群、下布田古墳群、

国領南古墳群と名付けられている。なかでも下布田古墳群のうち狐塚古墳（下布田６号墳）は終末期古墳としては都内で最大級の円墳として知られており、都指定史跡に指定されている。

集落跡は、武蔵野段丘縁辺部の深大寺城山遺跡、野川流域沿いの本村遺跡、調布岡遺跡で前期集落が確認され、立川段丘南縁部の上ケ給遺跡や調布岡遺跡などでは中期集落が確認されている。後期になると遺跡数は増加し、立川段丘南縁部に連なる飛田給遺跡から下布田遺跡にかけての各遺跡や、多摩川沖積低地の染地遺跡、武蔵野段丘縁辺部の寺山遺跡、仁王塚遺跡、深大寺城山遺跡、入間川流域の中台遺跡、入間町城山遺跡、仙川流域の仙川遺跡などが挙げられる。このうち立川段丘南縁部の各遺跡と染地遺跡の後期集落は、長期にわたって継続して営まれており、なかでも染地遺跡は、古墳時代後期から平安時代まで続く市域でも最大規模の古代集落で、これまでに 100 軒を超える竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されている。また、対岸に位置する川崎市寺尾台廃寺と同様、稲城市瓦谷戸瓦窯で焼かれた８世紀中葉の剣菱文軒丸瓦が出土しており、古代寺院の存在も想定される。

(4)　古代

律令時代の市域西部は、武蔵国多磨郡小島郷に属していたと考えられている。これまでに官衙に関連する遺構は確認されていないが、官人が身に付けた銙帯の部品（鉸具・巡方・丸鞆・鉈尾）が飛田給・上石原・下石原・上布田・下布田・染地の各遺跡から出土している。なかでも上布田遺跡の巡方は約 3.5 ㎝四方の金銅製で、かなり上級の官人用だった可能性がある。また上石原遺跡では、焼損はしていたものの、9 世紀初頭に京都府栗栖野瓦窯（官窯）で生産された二彩多口瓶（都指定有形文化財）2 個体が、下布田遺跡の沖積低地部では、鋤柄や櫛などの木製品とともに「国厨」の墨書土器（9 世紀中頃）が出土しており、武蔵国府との関連が注目される。

(5)　中世

10 世紀末以降は遺跡の分布が希薄となる。下石原遺跡では 1 万枚を超える大量の出土銭とともに中世居館の区画溝が検出されており、太田道灌の曾孫にあたる太田康資（新六郎）系列の太田氏、または康資と主従関係にあった石原氏の居館跡と推定されている。上布田遺跡内には、布多天神社（延喜式内社）の故地とされる古天神跡があり、文明年間（15 世紀後半）の洪水により甲州街道北側の現在地に遷座したと伝えられるが、これまでのところ古天神跡周辺で神社の存在をうかがわせる遺構・遺物は確認されていない。このほか上布田遺跡、下布田遺跡、飛田給遺跡では、地下式坑や集石土壙墓、積石墓など中～近世の墓域が確認されている。また、武蔵野段丘南縁部の舌状台地上には、天文６年（1537）に扇谷上杉氏によって築城された深大寺城跡があり、国指定史跡に指定されている。

(6)　近世以降

近世には、五街道の一つである甲州街道が市域を横断し、布田五宿が設けられ、宿場として宿駅制度である人足・伝馬を担い、近隣の村々は助郷として支えた。近代になると、京王線の開通、甲州街道の整備等による交通基盤が整えられる。太平洋戦争開戦後は、軍需工場が市域に進出するとともに、首都防空のための陸軍調布飛行場の竣工をはじめ、照空隊陣地等が国分寺・府中崖線沿いに整備される。